

カムパネルラ

～カムパネルラとは～

宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』でジョバンニと旅をする友人なのは言うまでもありません。絵本が開く異世界への道案内人としての意味を込めたものです。

Vol.12 2009年9月号

授業の場で取り上げた絵本・・・佐藤 雅子
水に触れる・・・藤田 博
小学校外国語活動の導入にぴったりの絵本・・・小澤 晃
無償の愛について教えてくれるこの一冊・・・畠山 美緒
新刊紹介・・・藤田 博

授業の場で取り上げた絵本

佐藤 雅子

私は「保育内容の指導法 B」という授業で、絵本を一冊紹介し、読み聞かせもしている。幼稚園教員資格取得の授業なので、絵本について知ってほしいことと、大人でも読み聞かせの体験をしてほしいという考えで取り組んでいる。また短時間で感想を書いてもらって出席票にしている。毎年10～12冊程度紹介しているが、できるだけ多様な絵本を取り上げるようにしている。今年度の授業の中から3冊取り上げ、学生の感想も紹介したい。

五味太郎作・画『海は広いね、おじいちゃん』（絵本館）



五味太郎独特の絵と色使いが楽しい。この絵本では子どもと老人（おじいちゃん）の組み合わせにナンセンスの世界が加わったおもしろさがある。

学生の感想「ずっとニコニコしながら楽しめた絵本でした。宇宙人が現れた時は、本なんか読んでないで助けないと連れ去られちゃうよと少しヒヤヒヤしたし、子どもがなにを言っても見向きもしなかったおじいちゃんが“女の人”で反応するところには笑ってしまいました。子どもは大人の見ていないところ

で不思議な体験をするんだなあとはほえましく思っていました。まさか最後に宇宙へ飛ぶなんて思っていなかったので新鮮な驚きがありました。ナンセンスな絵本をもっと読んでみたいと思いました。」

彦 一彦作『ぶんた いなかだ』（福武書店）

田舎の暑い夏を、色濃く力強く表現した絵本である。絵本の隅々まで見たくなる懐かしい世界が描かれている。主人公はブルドックのぶんたである。

学生の感想「あたたかみのある色彩と勢いのある筆使い、そしてどこか遊び心のある絵がとても素敵だと思いました。ぶんたが初めて見る海や山、いなかやすいかななどを独自の視点でとらえているのがおもしろいと思いました。驚きや疑問、楽しみや喜びなどがストレートに表現されていて、今では忘れてしまったけれど、幼い頃には私もぶんたのように一つ一つのできごとに多くのことを感じていたのかもしれないと思いました。」

学生の感想「真夏の暑い日をそのままぎゅっと閉じ込めたような絵本だと思った。夏の暑さや日差しのまぶしさ、夏独特の匂いや海の潮の香り、小船に乗っている感覚などがそのまま伝わってくるようであった。」

湯本香樹実文・酒井駒子絵『くまとやまねこ』（河出書房新社）



最初のページでくまが泣いている。仲良しだったことが死んでしまったのだ。墨絵のような色使いで、時が止まったような悲しい世界が表現されている。やまねこの出会いで仲良しの“ことりの死”を受け入れていくようすが心にしみる。ところどころわずかに使われているピンク色が効果的である。

学生の感想「死んでしまった小鳥の描写から、小鳥が死んでしまったことが信じられなくて、すごく悲しいくまの気持ちが良く伝わってきた。しかし、ひきこもっていたくまがやまねこと出会い、箱の中の小鳥を見せたときにやまねこだけが他の人とは違うことを言うてくれて、くまは嬉しかったのではないかなと思う。そしてくまは小鳥の死をきちんと受け止めて“思い出”にすることができて本当に良かったと思う。」

「海は広いね、おじいちゃん」五味太郎作・画 / 絵本館

「くまとやまねこ」湯本香樹実・作 / 酒井駒子・絵 / 河出書房新社

(幼児教育講座)

五感の頂点に立つのは視覚、最後に位置づけられるのは触覚です。最上位と最下位は動かない、決まっているということです。目や耳、鼻といった特定の器官ではなく、全身に行き渡る、それ故に未発達とされ、原初的とされるのが触覚です。視覚に比べてはるかに遅い、遅いが故に最も確かな感覚、触れることが相手から触れられる相互性を持った感覚であるのも触覚です。その触覚が水と結び合う、子どもを介することによって結び合うとすればなぜなのでしょう。



木葉井悦子文・絵『みずまき』(講談社)は、庭に水まきをする女の子を描いています。庭と水まきと女の子、ただそれだけのあたり前で日常的なもの。日常的でありながら、それを超えた非日常的なものが感じられます。「ああむしが いしがきを のぼっていく。とおもったら かめのこうらでした。」「むくどりが くさむらで えさを さがしてる。とおもったら うしのせなかでした。」との形が仕掛けられ、繰り返されることにより、大きなものが小さなものへと反転するのです。小さなものの視点が生きているそこには、プリミティブなものを感ずます。極太で大胆、幼稚とも思える絵のタッチが、その印象を強めています。小宇宙としての庭が大宇宙を映し出していると同時に、水が「命の水」となっているのがよく

わかります。「にわのみなさん あめだぞ あめだぞ」、高いところから水をかける女の子はさながら創造主、そう感じてしまうためかもしれません。「にわじゅう すっかり すずしくなりました。」すべてが新しくなり、生まれ変わります。再生の力を持つものとしての水もそこに描き出されているのです。

柴を刈りに山に行ったじさまは、きのこを取ってこいとばさまに言われたことを思い出し、脇道に入ります。そこに水を見つけます。「こんな うまい みずなら、ばさまにも のませて やりたいもんじゃ。」家に帰ったじさまは、ばさまから棒で叩かれます。「しわ ひとつ、いっぽんの しらがも」ない若い男になっていたじさまは、狐か狸が化したものと思われたのです。じさまが汲んできてくれるのを待ち切れないばさまは、一人出かけていきます。じさまが水のありかまで行ってみると、ばさまは赤ちゃんになっていました。「わくわくしたい、きれいに になりたいと」水を飲みつづけたばさまは、赤ん坊に戻ってしまったのです。川村たかし文・梶山俊夫画『若がえりの水』(教育画劇)が、養老の滝の伝説によるものであるのは言うまでもありません。いつの世も、すべてを手にした最高権力者が追い求めた究極のもの、それが不老不死の妙薬、若返りの水もその一つです。老いることは宿命とすれば、若返ることへの願望につながって当然です。元日の朝、もしくは春分の日朝に汲む若水は、始まりへと戻る、始まりの意識をもたらします。水は始まりとしての生水となり、終わりとしての死水となります。二面性を持ったその水が老いと若さをつなぎます。水が媒介することによって、円環的時間が生まれるのです。



長谷川摂子文・英 伸三写真『みず』(福音館書店)は、水と子どもを写した写真集です。「みず みず みず いろんなみず」「ゆゃあん よぁあん しずかにゆれて みずのなかにとけそうだ」「じっとてをひたしていると つめたくて ゆびさがちんちんしてくる」視覚的なものの代表としての写真、そこに触覚的なものを感じるとすれば、対象が水であるためと言えるでしょうか。視覚的なものだからこそ、その対極にある触覚的なものがより強く感じられるということです。もう一つ、カメラが子どもに向けられていること。子どもと水は、子どもはどうして水遊びが好きなのかから始まる、触覚に係わる根源的問いかけを含んでいます。水と出会うところ、決まって子どもの歓声が響き渡ります。水に触れたときの歓声は子どもだけではなく、大人も同じです。その歓声は、水に対する恐れと畏れとにつながっています。それを忘れてしまったとき、そして水がめぐり来るものであることを忘れてしまったとき、あらゆる生は終わりを告げると言って過言ではありません。水に触れることは、水がめぐることへの想いに始まり、終わりはないのです。

「みずまき」木葉井悦子・文・絵／講談社

「若がえりの水」川村たかし・文／梶山俊夫・画／教育画劇

「みず」長谷川摂子・文／英 伸三・写真／福音館書店

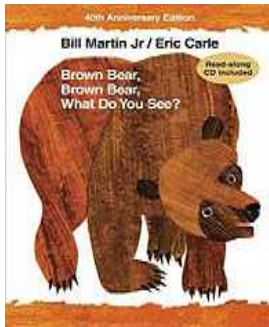
(英語教育講座)

小学校外国語活動の導入にぴったりの絵本

小澤 晃

附属小学校では、1年生から6年生まで全学年で外国語活動を行っている。題材は子どもにとって身近なものを選んで年間計画を立てている。特に、導入期の低学年では、「あいさつ」からはじまり、次に「数」「色」「動物」「食べ物」などを取り上げている。これらの題材は、一つ一つ別々に扱うのは不自然であり無理も生じてくるので、自然と何度も繰り返し登場するように題材構成をするようにしている。

以上のように題材構成を考えたとき、この絵本 *Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?* は、国語（英語）活動の導入にとっても適していると言える。



Brown Bear, Brown Bear, What do you see?
I see a red bird looking at me.
Red Bird, Red Bird, What do you see?
I see a yellow duck looking at me.
Yellow Duck, Yellow Duck, What do you see?
I see a blue horse looking at me. ...

次々とカラフルな動物たちが見開きいっぱいに登場してくる。そして、テンポのいい文章と韻を踏んだリズムがとても心地いい。このパターンが何度も繰り返されるため、子どもたちは体を動かしながら歌い、自然に色の名前も動物名も言えるようになってしまう。

実際の授業では、最初はゆっくり読み聞かせをする。すると子どもは、次はどんな色のどんな動物が出てくるのだろうと目を輝かせる。内容が分かったら、次にリズムに合わせてチャンツする。3回目ぐらいからは絵を見なくても言えるようになり、子どもってすごいと思わされる。また、子どもたちの中に必ず盛り上がる場面ができてきて、とても楽しくなってくる。

決まりきったチャンツだけでは、物足りなくなってきたら...「オリジナルカラフルアニマルを作ろう!」と投げ掛け、登場する動物たちのぬり絵をさせる。すると、絵本とは違った色とりどりの動物たちが完成する。中には2色だったり、レインボーカラーだったりとても楽しい。ぬり絵をしている途中で、“What is this?”と聞いて回ると、“Blue Dog.” “Black and Yellow Cat.” などときちんと答えることができていた。みんなの作品が出来上がったところで、完成した動物たちを紹介させる。そのうち、子どもから「みんなの作った動物でチャンツしようよ!」という声が上がってくる。そこで、“Teacher, Teacher, What do you see?” からスタートし、オリジナルチャンツを行ってみる。子どもたちは自分たちが作った絵だけを見て、きちんとリズムに乗って歌うことができる。これには驚かされる。

Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?

ビル・マーチン作／エリック・カール絵／Henry Holt & Company

（附属小学校主幹教諭）

浜田廣介・作／いもとようこ・絵『ないた赤おに』（金の星社）

畠山 美緒

この作品は、童話絵本の中でも多くの人に読まれ、知られているものの一つです。浜田廣介の代表作が、ぬくもりの伝わるいもとようこのイラストで、大人になっても忘れたくない物語として描かれています。



心優しい赤鬼には人間と仲良くなりたい夢がありました。友達の青鬼は、その願いを叶えるべく、自らを犠牲にして、赤鬼が怖い鬼でないことを村人たちに証明します。そのおかげで、赤鬼は人間の友達をたくさん作ることができました。しかし、赤鬼の願いが叶ったその後、青鬼の姿は見えなくなってしまいます。赤鬼と人間との関係を壊したくないと思った青鬼は、赤鬼の幸せを願いながら、赤鬼の前から姿を消してしまったのです。

青鬼のその行動は、赤鬼の目にはどう映ったのでしょうか。人間と仲良くなることと引き換えに青鬼を失ってしまった赤鬼は、青鬼が残した手紙を読んで涙を流して泣き続けます。青鬼がいなくなってしまった悲しみ、寂しさ、青鬼の思いやりの深さへの感謝、さまざまな気持ちを感じ取ることができます。

絵本の最後は、青鬼の手紙を握り締めて立ち尽くす赤鬼の姿で終わっています。私にはその姿が、どうして何も言わずにいなくなってしまったのだとの悲しみに浸っているようにも、優しさへの感謝の気持ちでいっぱいになっているようにも見えました。青鬼の無償の愛の尊さが、赤鬼の涙を通して読者の心にしみ込めます。赤鬼の流す涙は、青鬼がいなくなってしまった寂しさよりも、自分を思ってくれていたことがひしひしと伝わってきたからのものと感じました。見返りを求めず、相手のためだけに行動した青鬼の無償の愛は、いつの時代も読み手の心を温かくしてくれるように思うのです。

（技術教育専攻4年）

新刊紹介

チャン・ Cholmun 文／ユン・ミスク 絵／かみやにじ訳『ふしぎなしろねずみ』（岩波書店）

「あめが しとしと ふるひのことでした。おじいさんは すやすや ひるね、おばあさんは そばで めいものをしていました。」おじいさんの鼻の穴を白いねずみが出たり入ったりしています。そのねずみは「しきいを ひょいと こえて」外へ出ていくものの、水たまりを前に立ち往生。おばあさんが、縫いものに使う物差しを水たまりに置いて通してやります。「しろねずみは おばあさんを ちらっと みあげると、ものさしを ちょこちょこ わたっていきました。」雨が降っているのがねずみにわからなかったはずはありません。おばあさんを試すために出ていった、雨だからこそ出ていったのです。ものを測る物差しが、おばあさんの心根を測ったとは言えないでしょうか。

「おじいさんは まだ ねていました。おばあさんは また めいものを はじめました。」ねずみは「しきいを ひょいと こえて もどってきました。」おじいさんの鼻の穴に戻ったねずみは、おじいさんのことばを借り、金が入った壺のありかを語ります。ねずみの後をついていったおばあさんには、それがどこなのかすぐにわかりました。「おじいさん、そこへ いきましょう。」おじいさんが見た夢の形をとることから、おじいさんの「手柄話」に見えていて、実はおばあさんの「手柄話」になっているのがわかります。幸せに暮らすおじいさんとおばあさんを伝える最後のページで、おばあさんはまた縫いものをしています。そのおばあさんの鼻の中にねずみがいるのです。縫いものに欠かすことのできない物差しには、北斗七星が描かれています。この北斗七星がおばあさんの「幸運」を指し示してくれたのかもしれませんが。



これは韓国の昔話「魂(たま)ねずみ」の絵本版です。ねずみが授けてくれる宝物ということから、「ねずみ浄土」との比較が可能です。転がるおむすびの後を追ってねずみの穴に入ったおじいさん、「おむすびころりん」の昔話です。「魂ねずみ」では、おじいさんがねずみの穴を訪ねる形になっていない、加えて「隣の爺型」になっていないのがわかります。夢に見たものが正夢になることから、「味噌買い橋」との比較が可能になります。「魂ねずみ」では、おばあさんを道案内するのも、おじいさんの口を借りて語るのもねずみです。行って帰るのはねずみ、中心はねずみということです。鼻の穴に宿るねずみ、「魂ねずみ」として語られる所以です。

（藤田 博）

発行：宮城教育大学附属図書館